

# プロメテウスの農

1478

土よ 16

## 再開探る 稲も牛も

福島県飯館村での稲作は、畜産と深く結びついていた。稲わらは餌にし、牛舎に敷き、牛の糞尿と一緒に堆肥にして田畑で使う。そうして土づくりをしてきた。土の性質をつかみ、有機物や微生物を活用する。

「農業やる人は科学者だよ」  
菅野宗夫(64)は、そう言われて納得したことがある。

菅野も稲作をしながら和牛の繁殖を手がけ、11頭の親牛を飼っていた。最初は父の次男(92)が、酪農から始めた。

「小学生のころ、牛の背中に乗って隣の家に行って叱られたなあ」  
村外の高校に進学し、住み込みで新聞配達をしながら通った。北海道の帯広畜産大で学び、牛と一緒に貨車に乗って福島へ帰ってきた。

広域的な農業開発が計画され、農業が大きく変わろうとしていた時期。大変さはわかっていたが、自然のなかで営む農業にかけた。

木造の牛舎は菅野が建てた。払い下げになった小学校の体育館を解体して山越えて運んだ。瓦屋根だったのを赤い屋根にふき替え、コンクリートも自分で敷いた。

「飯館牛」は村をあげた取り組み



自分で建てた牛舎

でブランド牛として知られるようになっていく。

今、その牛舎にも牛の姿はなく、ポランテアと取り組む活動の資料

や、原発事故後に村で採取した土や植物などの保管庫が置いてある。

畜産も含めた農業再開について、村は10月、進め方や課題について話し合う検討会議を立ち上げた。

メンバーには、避難先で畜産や花栽培を続けている村民もいれば、村内のハウスでイチゴ栽培を再開した村民もいる。

予定では来年度に農地除染が終わる。だが、今も中間貯蔵施設の用地を確保できていない。それだけに、田んぼとして条件のいい場所に置かれた、汚染土などの袋は当面そのまま

まだどう。そもそも、またコメを作りたいという声は少ない。

11月にあった2回目の会合では、そんな話も出た。

菅野はメンバーではないが、村の農業委員会の会長として傍聴し、熱心にメモをとった。

安全に作れるのか、売れるのか。村で農業をまた始めたいという人がいても、不安なのだ。菅野は思う。

「国は避難指示を解除して終わりかもしれないが、俺たちはそこからがスタート。マイナスからのスタートなんだ」  
(菅野有希子)

# プロメテウスの農

1479

土よ 17

## 農業で暮らす日まで

福島県飯館村で、菅野宗夫(64)はポランテアや研究者らと除染した田んぼでコメをつくってきた。

濁った水が田んぼに入らないよう、水の管理には気をつけた。

だが、その努力も9月の豪雨で川があふれ、かき消された。

土砂が流れ込んだ田んぼでは、土壌のセシウム濃度が上がり、コメへの影響が心配だった。

この14日、出荷はしないが県の検査を受けた。妻の千恵子(63)が、祈るように見つめた。

検査機に表示されたのは丸印。17袋すべてが、1kgグラムあたり100Bqの基準を下回った。

「おとくに電話すっか」  
用事で来られなかった菅野に伝えようと、千恵子の声が弾んだ。

自然の恵みと厳しさを、菅野は思

う。コメがまだ十分に熟していない時期に水害があったら、また違う結果だったかもしれない。

だからこそ、データを積み重ねていくことが将来の財産になる。自分たちで測ることで、実感できる。

山の除染は手つかずで、いつまた川があふれるかわからない。国による除染が終わっても、放射能はゼロになるわけではない。



稲刈りを終えた田んぼ

「飯館でコメつくったって、どうせ売れな」  
そんな声も聞かされてくる。

菅野だって、不安がないわけでは

ない。避難後、テレビをつけていないと夜眠れなくなったし、健康診断でも初めてひりかかった。

でも、毎週村へ通ってやるポランテアたちと挑戦するうちに、ストレスは減ってきたと感じる。

「放射能には出会いたくなかったけど、出会えた人たちには感謝だ」  
つくったコメも、最初は廃棄しなければならなかった。それが昨年から試験を認められるようになった。

ポランテアと始めた村内の放射線測定には、他の村民も加わり、村から委託を受けるまでになった。

元通りにはならない。だけれど、このままおしまいにしてしまえるか。

村を見学に来る学生たちには「長い目で見てほしい」といっても言っている。

自分でも見つめたい。

村が、自分が、どう変わっていくのかを。

◇ (菅野有希子)

次回から第76シリーズ「立地屋」に入ります。

ご感想をはがきや手紙で送って下さい。宛先は〒104・8011朝日新聞東京本社 特別報道部です。